

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

春の惑い

2002年・中国映画・116分
配給/角川大映映画

2003(平成15)年8月1日鑑賞
〈梅田ガーデンシネマ〉

Data

監督：田壮壮(ティエン・チュアン
チュアン)

出演：フー・ジンファン/呉軍(ウ
ー・ジュン)/辛柏青(シン・
パイチン)/芦思思(ルウ・
スースー)/葉小鏗(イエ・
シャオカン)

👁️👁️ みどころ

1993年『青い罎』で東京国際映画祭の東京グランプリを受賞した田壮壮(ティエン・チュアンチュアン)監督の10年ぶりの作品だが、何とこれは1948年の費穆(フェイ・ムー)監督の『小城之春』のリメイク版。抗日戦争が終わった1946年の春、蘇州の小さな村に住む、倦怠期にある旧家夫婦の前に現れた夫の旧友はかつての妻の恋人だった!こんな3人の心の動きを丹念に表現するこの映画は、今風の映画とは全く異質だが、かえってそれが新鮮!ベッドシーンはもちろんキスシーンの1つもないものの、大人の心理ドラマを十分に堪能できる作品だ。

〈田壮壮監督の最新の作品〉

田壮壮(ティエン・チュアンチュアン)監督は陳凱歌(チェン・カイコー)、張芸謀(チャン・イーモウ)と並ぶいわゆる中国第5世代監督の代表格。しかし、彼は1993年に東京国際映画祭の東京グランプリ、ハワイ国際映画祭の最優秀作品賞を獲得した『青い罎』以来、いくつかの映画の製作、企画に携わったものの、監督としての作品がなかった。

そんな田壮壮監督の最新作が本作だが、これで見事にヴェネチア国際映画祭サンマルコ賞(コントロコレンテ部門グランプリ)を受賞した。

〈『春の惑い』は『小城之春』のリメイク〉

その田壮壮監督が挑戦したのは、1948年に費穆(フェイ・ムー)監督がつくった昔の名作『小城之春』のリメイクだ。このタイトルの意味は「小さな町の春」。もちろん、私はこの映画を観たことはないが、チャン・イーモウをはじめとする多くの映画人が中国映

画のベスト・ワンにあげている作品とのことだ。

時代は1946年。抗日戦争が終わった翌年の春。小さな町に生きる旧家の人々の不安と倦怠、秘めやかな恋情を伝えた心理劇、とのことだ。

新聞やチラシ等でこのような事前情報を得た私は、どうしても観たいと思い、平日の朝、自転車に乗って梅田ガーランシネマまでの映画館通いを敢行した。

<登場人物は3人プラス2人>

時代は1946年。長かった抗日戦争が終わり、やっと蘇州にある小さな村にも春が訪れていた。この映画の登場人物はごくわずか。まずは主人公の女性、玉紋（ユイウエン）（フー・ジンファン）とその夫の戴礼言（タイ・リーイエン）（呉軍ウー・ジュン）。玉紋は戴家の跡とりの礼言のもとに嫁いで8年になるが、礼言が病気を患って以降、夫婦の間に来た溝を埋めることができず、ただ責任感として、妻としての義務を果たしているだけ。数年前からは寝室も別々にしており、今風に言えば「セックスレス」の夫婦だ。

古いけれども、広大な礼言の屋敷に住むのは、礼言の妹戴秀（タイ・シウ）（芦思思ルウ・スースー）と昔からの使用人の老黄（老ホアン）（葉小鏗イエ・シャオカン）の2人。戴秀は女学生で、もうすぐ16歳だ。

主人公となる登場人物のもう1人は、礼言の旧友の章志忱（チャン・チーチェン）（辛柏青シン・バイチン）。各地を転々としながら、抗日戦争を戦った志忱は、今は上海で医者になっている。

物語は抗日戦争が終わり、志忱が旧友の礼言を訪ねてきたところから始まる。登場人物は上記の主人公ら3人と脇役の2人だけ。そして、舞台もはじめから終わりまで、この礼言のお屋敷の中だけだ。

<物語のキーポイントは2つ>

物語の第1のキーポイントは、玉紋と志忱はかつての恋人同士であり結婚寸前まで進んでいた仲だったということ。志忱との10年ぶりの再会を喜んだ礼言は、自分は今は結婚していると告げ、妻の玉紋を紹介した。

玉紋を見た志忱はビックリ。そりゃそうだろう。かつて自分が結婚しようとしていた女性が、10年ぶりに再会した親友の妻だと紹介されたのだから。そこからおこってくる様々な男と女の間の恋の想いと友情の揺れ・・・。

物語の第2のキーポイントは、16歳という年齢。礼言が玉紋と知り合ったのは、玉紋が16歳の時だった。そして、志忱は16歳になろうとする礼言の妹の秀から章兄と慕われている。礼言は真剣にこの妹の秀と旧友の志忱を結婚させようと思い、妻の玉紋にその

プランを打ち明けた。もちろん、志忱はそんな気持ちがない。しかし玉紋は……。女心は本当に微妙だ。

<ピッタリのタイトル、『春の惑い』>

今日は秀の16歳の誕生日。その妻の誕生日の席で、ジャンケンゲームをしながら、したたかに酔った志忱は、つい「玉紋も実は酒は強い人ですよ……！」としゃべってしまった。その言葉がきっかけとなり、礼言はかつての志忱と玉紋との関係を覚えてしまった。そこからは、礼言と志忱、礼言と玉紋、志忱と玉紋の間には微妙な恋情と友情の動きが……。

この映画はそんな3人の心の動きを実に丁寧に追っていく。2時間近くのドラマのすべてがそれにあてられている。だから、この映画の『春の惑い』というタイトルは実にピッタリだ。もっとも、そういう何となくお色気タップリのタイトルでありながら、そしてまた、倦怠期にあるセックスレスの夫婦の前に突如登場した妻の昔の恋人、という状況設定でありながら、ベットシーンはもちろんキスシーンすらもない。

今風の映画とは全く違うつくり方の映画だが、なぜかかえってそれが新鮮……。

<物語の結末は……>

こんな3人の微妙な関係がうまく続くはずがない。しかも礼言の16歳になる妹の秀と志忱を結婚させようという話まで絡んでくると、「4人」の微妙な関係になってくるから、なおさらだ。玉紋は嫉妬心に悶えながらも、志忱を引き止めるためには、妹と結婚させるしか方法がないかと考えたり、あるいは誕生日パーティーの夜には遂に意を決して志忱の部屋に入り込んでいったり……。やはり、女はハラを据えると怖い(?)……。そして、やはり理性的なのは男(?)……。ここで身を引き、上海へ帰ろうとしたのは志忱だ。しかし、礼言はそんな志忱を1日だけ引きとめる。そして、その日にとった礼言の行動は……。そんな礼言を見た玉紋は……。それは映画を観ての楽しみだ。

何とも複雑な男と女の愛情。そして男と男の友情。微妙な心の動き、気持ちのアヤを静かなストーリー展開の中、見事に表現してくれる今時珍しい映画だ。

さすが第1級監督の田壮壮監督作品だと感心。

2003（平成15）年8月1日記